

『病理検査室の暴君』

著: 春原いずみ

ill: 六芦かえで

その部屋は、病棟の三階、手術部と同じフロアにあった。

「病理検査室……」

「うちは院内に病理検査のできる施設を持っているんだよ。外注に出すことはほとんどない」

「……少し珍しいね」

病理学とは病気の原因、成り立ちを追求する基本的な学問であり、病理検査は生体から採取した組織などの材料をもとにして、観察に向けた処理を行い、診断までを行う一連の操作を指す。病理検査は、特殊な処理を行う手技と高度な専門知識を必要とするため、ほとんどの病院が専門機関や大学の病理学教室に外注している。病理学を専門とする医師自体が非常に少ないのである。

「おかげで、僕たちは助かっているけどね。組織の結果を一週間も十日も待たされずに済むから」

病理検査室はしんと静かなフロアの端にあった。患者を直接扱わない部署であるため、あまり人が近づくこともなく、手術のない今は、廊下も静かだ。順唯がコンコンと軽くドアをノックすると、『受付』と書かれた窓から、ひよいと女性が顔を出した。

「あ、水原先生。どうなさったんです？ 昨日の検体ならまだ……」

「違うよ。主は？ いる？」

「その呼び方、冴(さえ)木(き)先生の前でなさらさないで下さいね。機嫌悪くなって、扱いが面倒なんですから」

“冴木先生……？”

順唯がドアを開けた。中は様々な機器や試薬瓶(びん)の並んだ棚、大きな実験テーブルが並び、ちょうど規模の大きな理科室のようだ。

「水原か？ 昨日の検体はまだ固定が終わってない。てか……もつとでかく取れよ。あんなカスみたいな検体じゃ、切り出しもできやしねえ」

よく響く声があった。と同時に、顕微鏡の陰から長身がぬっと立ち上がった。

「わ……」

思わず、嗣巳は小さな声を上げていた。

百七十センチぎりぎりの身長でほっそりとした嗣巳に比べて、その人影はたっぷり二回りは大きかった。恐らく百九十近い身長に、がっしりと肩の張ったプロポーション。ラフに羽織った白衣の肩の辺りがきつそうだ。

「あれ以上大きく取ったら、胃壁に穴が開きそうだったんだよ」

順唯はおっとりと答えて、反射的に背後に隠れた嗣巳をぐいと前に押し出した。

「僕に弟がいるのは知ってるよね。今度、うちの外科に来たんだ。弟の嗣巳だよ」

“ひ……”

目の前に立つ御(ご)仁(じん)は、不思議な瞳の色が印象的だった。光の具合で、一瞬ダークブルーに見えるような深い黒の瞳だ。光彩の部分の色も濃く、瞳の印象が恐

ろしく強い。顔立ちはナイフで削りだしたように鋭く、彫りが深い。体格の良さも相まって、欧米人と言われても納得できそうな雰囲気を持っていた。

「こいつは病理医の冴木礼(れい)司(じ)。僕の高校時代からの同級生で、小田川唯一の病理医。だから、この部屋の主」

「だから、その牢(ろう)名(な)主(ぬし)みたいな呼び方はやめろ」

心底不快そうに言って、冴木は口元を歪(ゆが)めた。

「外科……佐々木圭の配下か？」

「そうなるね。腹部外科だから。てかさ、外科部長を呼び捨てはやめなよね。いくら仲が悪いからって」

順唯が苦笑しながら言った。

「まあ、冴木と佐々木先生じゃ、水と油だから仕方ないところだろうけど」

「俺と佐々木の仲が悪くて、お前になんか迷惑かけたか？」

冴木の声は恐ろしくよく響く。

「別に。でも、いくら佐々木先生と仲悪いからって、僕の弟までいじめないでよ」

順唯はにこにこしながら、つけつけと言う。

「僕と違って、この子、超打たれ弱いんだからね。メスだけ握らせておけば天才クラスなのに、人間関係ド下手だから」

「微笑みの鉄仮面とまで呼ばれたお前の弟らしくもねえな」

冴木は白衣の胸ポケットから華奢なフレームの眼鏡を取り出すとひよいとかけた。

妙な迫力のある男っぽい風(ふう)貌(ぼう)が急にインテリ臭(にお)くなった。顔の作り自体は、若(じゃっ)干(かん)癖(くせ)はあるものの整っている部類(ぶるい)なので、眼鏡をかけると端(たん)整(せい)な感じが強くなる。

「顔は……案外似てねえな」

顔を突き出し、のぞき込まれて、嗣巳(すゐ)ははっと後(ご)ずさる。兄の胸にとんと背中が突き当たった。

「そう？ わりと似てるって言われるんだけど？」

「お前のこんな引きつった顔、見たことねえからな」

冴木は眼鏡を外すと、再びポケットに落とし込んだ。

「で？ この小動物に口はねえのか？」

“あ……っ”

嗣巳(すゐ)は慌(あわ)ててぴよこんと頭を下げた。

「げ、外科の……水原嗣巳(すゐ)です……っ。よ、よろしくお願(ねが)い致します……っ」

「検体は再採取(さいしゆ)がきかねえ。きっちり取って、依頼書(いひんしょ)は正確(せうかく)に書くこと。わけわかんねえことしやがるとオペ室(おぺしつ)に怒鳴(いか)り込むぞ」

“ひい……”

「冴木、うちの可愛い弟(あに)を脅(おど)すの、やめてくれる？」

「整形(せいせい)の小動物(せうぶつ)は噛(か)みつき返(かへ)してくるぞ」

「御崎(ごさき)先生(せんせい)は冴木(さいき)に負(ま)けないキャラ(きゃら)だもの。一緒にしないでよ」

ぽんぽんと飛び交(か)う二人(ふたり)の軽口(けいこう)を頭(かぶ)の上に、嗣巳(すゐ)は心(こゝろ)の中にわだかまる引(ひ)っかかりを覚(おぼ)えて、必死(めいじ)に記憶(きおく)を探(たず)っていた。

“病理(びょうり)……何か……いやあなことがあったような……”

事実(じじつ)、兄(あに)に連れられて、この病理検査室(びょうりけん査しつ)の扉(かど)を見た時(とき)、冷たいものが背中(せなか)を走(は)った

のを感じた。その感覚は嫌悪というよりもむしろ恐怖に近い。

人間の記憶は不思議なもので、それが嫌なものであればあるほど、逆に忘れてしまうという現象が起きることがある。決して本当に忘れているわけではなく、思い出したくないがために、記憶の奥深くにしまい込んで、鍵をかけてしまうのだ。しかし『嫌なことがあった』という潜在的なものは残っているため、その恐怖の対象に出会うと、わけのわからない嫌悪感が湧(わ)き起こってくる。場合によっては、記憶そのものがフラッシュバックしてくることもある。これをトラウマという。

「この前も、御崎先生とオペ室の電話で怒鳴り合いしたんだって？」

「あの小動物が結果を急がせるからだ。いくら迅(じん)速(そく)だったって、できることとできねえことがある」

“迅速(じんそく)だったって……できることとできないことがある……”

そのセリフを心の中でリフレインした瞬間に、嗣巳は心の奥底にしまい込んでいた強烈な記憶を呼び戻していた。

「う、嘘……」

本文 p21～28 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>